

## ▽会員の通信 ▽▽▽

木原健太郎氏（東京学芸大学）

(1) 村落社会研究会のあり方にについては

何等批判がましいものはない。今までのやり方に追従して行くのが私の痛一杯だ。

(2) 研究通達五号で掲載されたとあら

れた摘要の内容はまことに結構と思う。内面のしょり方も多數の方々の今後の協力を考えるに、公的教的なこの様な方で妥当とし、委員会元の御盡力を

悉く思う。

(3) 私の如き農學が、村落調査する場合

痛切に思する事は確定は済査方法の長い事だ。勿論方法は調査地域や調査主題によって異なる事は当然であるが、社会調査の領域における最近めざましく變貌をとげている方法（然義の）それ自体についての知識が果していかなる程度農業と利用できるかを検証し、且つ主題との関連において、新たに考察する事を必要と思う。勿論「村研」の会員の討論の過程にてこれは十分議り込まれていたと思うが、調査のテクニッ

ク一 Planitzer にあると云ひ得る面もすくなくほいが——にもウエイトを置いておるのだと、その事がはつきり打ち出されると、より針立つて貰えれば、これによつて得る所の多い人もあると思う。これ

は私の如く農村アロパーを研究主題とする所はさく、社会調査における Effort-

numericalなどを、どのように具体的に考えて行つたら良いかの、へそ曲りの立場から、村落をフィールドとして、二、三年この方やつて来た者の意見とともに思ふ。

(4) 有笑先生の「小作制度」を最近読みか

えして強く感することは、「村研」の当初からの勤さに明らかに如く、現今村落の状況と先生の扱われた時期との广大

事だ。勿論方法は調査地域との工夫

によって異なる事は当然であるが、こ

の点については先生の近時の業績が若々

の如きを導いて下さっておるが、こ

の点は十分考慮しなければならないとし

ても、あのよろにはつきりした性格とし

て村落社会の構造が打出されて来ないとする事も必要と思う。これは地域差、

歴史的時期差と共に、扱い方——再びテクニックも含めての差であるが、

かと思つ。この点では、命令せの初めの頃にどめたかの意見としてあつたかも知れないが、来年度以降は、無理のないグループのつくり方をして、共同調査をやつて見て、諸先生方の考えておられた

方法をいろいろ参考するとはつきりする

事だ。私は Parsons's Toward a General Theory of Action を読み心としたが、共同作業はむづかしい事ながら、やはり必要と思う。今日の如く村落研究も進み、諸先生の研究方法が少しづつ進つており、結構元の導き方の差が目立つて来るヒヘ差があつても良い

が、農學のものが別に切実な問題意識を持つようにする事在案して頂きたい。

(5) 私は二、三年前から伊豆の村々を調査していくが、そこは文化形態が均一ではなく、変化があり、文化形態の去來方をみると、づけるに適宜な土地なので、西尾、南豆、南竜、東竜を区別してこの問題を考

察し、いわば制度的るものと意識的なものの関連を斜け付たりと思つてゐる。調査の便宜があれば参加したい。